

副専攻卒業論文：人文科学（言語学）

日本語教育における形容動詞の扱い

—国文法との比較を通して—

慶應義塾大学法学部政治学科4年

学籍番号 31161439

松本 靖代

指導担当者：小屋逸樹先生

提出日：2015年1月27日

目次

はじめに

I. 日本語の形容動詞の位置づけ

1. 国文法の中での形容動詞

2. 日本語教育における形容動詞

II. 「ナ形容詞」と形容詞との関連

III. 「ナ形容詞」の断定形と“名詞+だ”との関連

結論

参考文献 ・ 参考資料

はじめに

日本語学習者のアメリカ人の友人が、「嫌いだ」の否定形を、「嫌いでない」ではなく、「嫌くない」と言う。これは形容動詞の語幹である「嫌い」が、“い”で終わっているために、同じく“い”で終わるといふ特徴がある形容詞と混同してしまった結果であると予測できる。彼らにとっては、「嫌い」は「悪い」と同じように、自分の好みに合わないという状態を表す語彙なのである。

この「嫌いだ」に代表される形容動詞という品詞は、名詞や動詞や形容詞と違って、どの言語に見られるものではない。のちに述べるが、形容動詞と言う品詞は、読んで字のごとく、形容詞の特徴と動詞の特徴をあわせ持っていると考えられて名付けられたものである。それゆえに、日本語学習者の混乱も大きい。

本論の目的は、日本語における形容動詞の位置づけを、国文法・日本語教育双方の視点から再確認し、日本語教育において形容動詞を他の品詞と並べてどのように扱うことができるかを考えることである。

I. 形容詞の位置づけ

ここではまず、本論で取り扱う「形容動詞」について整理する。

1. 国文法の中での形容動詞

形容動詞と言えば、広く学校文法で一品詞として取り上げられており、動詞・形容詞とともに、用言として扱われている品詞である。

日本語の文法の研究において、形容動詞という概念が登場するのは、ロドリゲスの『日本大文典』、西欧文法との比較から生まれた洞察によるのが最初とされている。意味は形容詞と似ていて活用は動詞と同じ、という意識のもとに、江戸時代以来議論の対象になってきた。形容動詞という名称が用いられたのは、明治 37 年の『中等教科明治文典』に芳賀矢一が“よかり”“詳なる”“整然たり”等の「カリ・ナリ・タリ活用」の語を「性質が形容詞と等しく、活用が動詞と等しい」ということから命名したのが最初だそうである。その後、昭和 7～10 年には吉沢義則・橋本進吉の説が発表され、昭和 19 年に文部省による国定教科書『中等文法』が橋本の文法学説に基づいて編纂され、以後、形容動詞が一品詞として学校文法で扱われるようになった。

正確には、芳賀の「活用が動詞と等しい」という観察は、間違っている。“ナリ”や“タリ”、その流れをくむ今日の“だ”は、助動詞であり、動詞ではない。この点からして、なぜ形容動詞が形容動詞と呼ばれているのかは、疑問が残る点である。

だが今日では、学校文法を中心に、動詞・形容詞とともに用言として分類され、一品詞として確立している。

その形容動詞を分析してみると、大きく 3 種類に分けることが可能である。

①やまとことば系

柔らかだ、詳らかだ、健やかだ、鮮やかだ、清らかだ、のどかだ、…

②漢語系

元気だ、有望だ、重要だ、雑多だ、本当だ、新鮮だ、独特だ、…

(古典文法でタリ活用のとされている形容動詞はこの漢語系であるが、現在は、その連用形が副詞に、その連体形が連体詞に、それぞれ分類されているため、漢語系形容動詞に

は含まない。

例…堂々たり→堂々と・堂々たる、泰然たり→泰然と、寂寞たり→寂寞と・寂寞たる、
茫々たり→茫々と・茫々たる、…)

③外来語系

スマートだ、フレッシュだ、ストレートだ、ジューシーだ、ハードだ、…

これらは全て、事物の性質・状態や人間の感覚・感情などを表しており、意味的に形容詞と合致していることが確認できる。一方、「だろ・だっ（・で・に）・だ・な・なら・〇」と活用する活用語尾は、助動詞「だ」とほとんど同じである。

2. 日本語教育における形容動詞

日本語教育では、国文法における形容動詞を、「ナ形容詞」と呼び「形容詞」の下位分類の一つとして学ぶ方法と、「名詞的形容詞」と呼び「名詞+だ」と同じくくりで学習する方法の2種類が、一般的である。

まず、一番多いのが、「形容詞」には2種類あると教える方法である。その2種類とは、「イ形容詞」と「ナ形容詞」で、連用形を基本形として、それぞれが名詞に係るときの語尾によって分けている。

「イ形容詞」の例… “おもしろい” 本、“ありがたい” 話、その初夢は “おめでたい”、この試験問題は “難しかった”、“早く” 走る、照れて “赤く” なる、…
「ナ形容詞」の例… “静かな” 場所、“敬虔な” 信者、彼女の立ち姿は “優雅だ”、この一週間は “肝心だ”、“元気に” 走り回る、“容易に” 想像できる、…

これらの例から分かるように、「イ形容詞」は国文法の形容詞に、「ナ形容詞」は国文法の形容動詞に相当する。日本人は学校文法で形容詞と形容動詞を別の品詞として学ぶため、両者を識別しているが、意味的に事物の性質・状態や人間の感覚・感情などを表し、インドヨーロッパ系の言語の文法で形容詞として扱われる語群と共通しているため、「イ形容詞」と「ナ形容詞」を一括して「形容詞」として位置づけ、それらを下位分類しているのである。

しかし、「ナ形容詞」の中には基本形が “～な” にならず、「ナ形容詞」よりも「ノ形容詞」と呼んだ方がいいと思われる語、「ゼロ形容詞」と呼んだ方がいいと思われる語が存在して

いることも事実である。

「ノ形容詞」の例… “独特の” 雰囲気 (? “独特な” 雰囲気)、“わずかな” 蓄え (× “わずかの” 蓄え)、、、

「ゼロ形容詞」の例… “同じ” 教科書 (× “同じな” 教科書)

「ノ形容詞」も「ゼロ形容詞」も、そもそも国文法の形容動詞の活用語尾でも説明しきれない現象であるが、母語として感覚的に形容動詞を習得した日本語話者ではない日本語学習者にとって、判断が難しくなっているところである。

一方で、活用の特徴としては「だ・である・です」と同じであることもまた注目されるべき点である。「名詞的形容詞」と名付け、終止形を基本形とし、「名詞+だ」との共通点に着目している。とくに、否定形や過去形は初歩的段階でも多用される表現であり、頻出であるため、二つの品詞の距離の近さを感じることができる。

Ⅱ. 「ナ形容詞」と形容詞との連関

さきに、日本語教育においては、「イ形容詞」「ナ形容詞」との下位分類のもと、国文法の形容詞と形容動詞がともに「形容詞」として扱われていることを見た。これが、形容動詞と形容詞との連関を強調する教授法である。

実際に、これら2種類の形容詞に見られる共通点は以下のとおりである。

①基本形で名詞を修飾する。

「イ形容詞」… “おもしろい” 本、“すごい” 技、“美味しい” 店、“あたらしい” 服、“おめでたい” 出来事、“仰々しい” 肩書き、、、

「ナ形容詞」… “元気な” 子供、“有名な” 人、“静かな” 場所、“穏やかな” 気候、“ジューシーな” 肉、“キャッチーな” フレーズ、、、

②述語になれる。

違いは断定形・丁寧形の作り方。

断定形は、「イ形容詞」はそのまま言い切り、「ナ形容詞」は“な”を“だ”にする。

丁寧形は、「イ形容詞」は“です”を付けるだけ、「ナ形容詞」は“な”を取った語幹に“です”を付ける。

「イ形容詞」… 夜景が“美しい”、部屋が“広い”、背が“小さい”、桜が“美しい”です、あの子は“可愛い”です、日の光が“まぶしい”です、、、

「ナ形容詞」… 心身ともに“健やかだ”、彼は生き様が“実直だ”、口当たりが“ソフトだ”、桜が“きれい”です、教会は“静か”です、宿題が“ハード”です、、、

③副詞となって動詞を修飾できる

違いは語尾。「イ形容詞」は“～く”となり、「ナ形容詞」は“～に”となる。

「イ形容詞」… “楽しく” 過ごす、“かいがいしく” 働く、“温かく” 出迎える、人里“遠く” 離れる、“優しく” 看病する、“義理堅く” 接する、、、

「ナ形容詞」… “詳らかに” する、“頑なに” 拒む、“懸命に” 努力する、方針を“大胆に” 変更する、困難を“スマートに” かわす、校庭を“エネルギッシュに” 駆け回る、、、

④質問文に対して「そうです。」または「違います。」と答えられない。

「熱いですか？」に対して「はい、とても熱いです。」または「いいえ、熱くないです。」、「元気ですか？」に対して「はい、元気です。」または「いいえ、あまり元気ではないです。」のようにその「形容詞」を繰り返し用いて答えなければならない。

⑤ “さ”をつけることで名詞化できる。

違いは語尾。「イ形容詞」は“い”を取り“さ”を付ける、「ナ形容詞」は“な”を取った語幹に“さ”を付ける。

「イ形容詞」…美しさ、甘さ、小ささ、大きさ、青さ、かわいさ、頼もしさ、…

「ナ形容詞」…綺麗さ、大きさ、純真さ、堅実さ、まるやかさ、フレッシュさ、…

* “大きさ”は、どちらの派生形とも解釈できる。

* “み”をつけることで名詞化できる語もある。

例…うまみ、おかしみ、凄み、高み、新鮮み、…

* “～的な”の形を取る「ナ形容詞」は、“さ”や“み”名詞化できない。“的”を取って“性”を付けることで、名詞化できるものもある。“的”を取るだけで名詞化する語もある。

例…合理的な→合理性、健康的な→健康、…

⑥ 否定形の時に“ない”の前に係助詞を入れて意味を付加することができる。

「イ形容詞」…美味しく“は”ない、怖く“は”ない、あまり高く“は”ない、まずく“も”ない、そんなに難しく“も”ない、大きく“も”小さく“も”ない、…

「ナ形容詞」…鮮やかで“は”ない、顕著で“は”ない、心中けっして穏やかで“は”ない、そこまで重要で“も”ない、言うほど変で“も”ない、馬鹿で“も”天才で“も”ない、…

活用の違いはあるものの、これらの意味的な用法について共通していることを強調するには、「イ形容詞」と「ナ形容詞」を並列して学習することは、非常に有効であると考えられる。

Ⅲ. 「名詞的形容詞」と「名詞＋だ」との連関

ここまで、「イ形容詞」と「ナ形容詞」は、性質において似通っているが、活用は異なっていることを見てきた。ここでは、国文法の形容動詞すなわち「ナ形容動詞」の断定形と名詞の述語形「名詞＋だ」が、活用という点において類似性が高いことに着目して、形容動詞を、「ナ形容詞」の断定形として「名詞的形容詞」という概念で学習する方法を見ていく。

現代の国文法においても、

彼はいつでも健康だ。(形容動詞)

彼の取り柄は健康だ。(名詞＋だ)

のように、形容動詞と“名詞＋だ”は、しばしばその判別が問題にされることがある。

初歩的な段階で重要になる両者の共通点は、以下のとおりである。

①断定形・否定形・過去形が同じ

「名詞的形容詞」…彼女は“綺麗だ”、この道は“平らです”、心中“穏やかでない”、そこまで“派手でない”、なんとも“スマートだった”、当時はとても“有名でした”、…

「名詞＋だ」…これも“国語辞典だ”、ほんの“気持ちです”、それは“教科書ではない”、断じて“嘘ではありません”、その時まだ“小学生だった”、ここが“宿題でした”、…

②動詞や形容詞や形容動詞に繋がる連用用法のときは“～で”となる

「名詞的形容詞」…いくつになっても“元気で”夏には登山もする、“にこやかで”優しい人、“穏やかで”フレンドリーな印象、…

「名詞＋だ」…いつもでも“子供で”世話が焼ける、“冷たい水で”気持ちがいい、“一匹狼で”頑固な父親、…

*「名詞的形容詞」は副詞的に使う時は“～に”となる。

例…毎日“元気に”学校に通う、毎朝“さわやかに”挨拶する、何をされても動じず“クールに”ふるまう、…

③仮定形のために“～ば”を使わず“～なら”を使う

「名詞的形容詞」…結果が“明らかなら”そこは省こう、“誠実なら”心配ない、そんなに“ハードなら”辞めればいいのに、…

「名詞＋だ」…“鉛筆なら”ここにあるよ、その“辞書”なら万能だ、“パソコンなら”

彼に聞けばいい、、、

④接続助詞への繋がり方が同じ

「名詞的形容詞」…心身ともに“健やかなので”心配なさそうだ、“ストイックなのに”
成績はイマイチだ、“単純だから”騙される、、、

「名詞+だ」…“アルミなので”軽い、“赤なのに”渋い、“イケメンだから”もてる、、、

たしかに、これらのように活用における共通点は多い。しかし、これらの共通点には、「イ形容詞」にも共通しているものもあり（例えば③）、「名詞的形容詞」と「名詞+だ」のみを取り上げることの意義は、明確になりづらい。

また、特にこの特徴が顕著なのは、語幹と活用語尾の繋がりが薄い、国文法の形容動詞の②漢語系③外来語系においてである。①やまとことば系については、語幹と活用語尾の連関が強いため、語幹のみを取り上げること、語幹のみを語彙として獲得することに違和感を覚えることもある。。

さらに、もし「名詞的形容詞」と「名詞+だ」をひとくくりにして理解させるのであれば、両者は共に“だ”をVとしてSVCの構造をしている構文であるという理解を伴うことになるであろう。その場合は、「イ形容詞」の構文がSVとして理解されなければならない、インドヨーロッパ語系の言語の話者に、混乱をきたすことが予想される。本来全く性質の違う語であるものをひとくくりにしてしまうことの弊害が、ここに生じる。

結論

現状で実践されている二つの教授法は、「イ形容詞」と並立することで「ナ形容詞」と形容詞との連関を重要視する方法を採ると、「名詞的形容詞」と「名詞+だ」との連関を強調する方法がある。前者は、意味的な用法の共通点に注目しやすく理解しやすい一方で、活用の実用が難しいという特徴が見られ、後者を採ると、活用は連体修飾以外で整理されるが、本来全く性質の違う語であるゆえに構文上の理解に差し障りがあることが分かった。

そこで、国文法における形容動詞を一品詞として捉えるという枠自体を撤廃し、形容動詞を細分化し他の品詞も加えて新たな枠組みを構築することで、意味用法と活用の両面において日本語学習者の理解を促す方法を提唱したい。

まず、インドヨーロッパ系の言語の文法に則り、「形容詞」と言う概念を導入する。この「形容詞」は、現在の国文法の形容詞よりも範疇が広く、事物の性質・状態や人間の感覚・感情などを表す語を指す品詞である。

次に、「形容詞」の下に、完全に活用する「形容詞」として「イ形容詞」「ナ形容詞」「ノ形容詞」「ゼロ形容詞」を並立させる。「形容詞」は活用するのだと学習者に提示することで、形容動詞の基本形を、「ナ形容詞」と連体形にするか、「名詞的形容詞」として断定形にするかという議論が不要になる。(したがって「ナ形容詞」は「ナ形容詞」と呼んでも「ダ形容詞」と呼んでも良くなるのだが、ここでは引き続き「ナ形容詞」の呼称を使うこととする。)「ノ形容詞」「ゼロ形容詞」は、I 2で挙げた「ナ形容詞」の例外的な位置づけに当たる「形容詞」であり、現代の国文法で言う動詞の変格活用のような位置づけを占めることになるであろう。

加えて、「タル形容詞」と、国文法で言う連体詞である「連体形容詞」、「こそあど形容詞」も、この並立に加えるのが良いと考える。「タル形容詞」とは、I 1②で漢語系形用動詞に含めないとした、古典文法でタリ活用のとされていた形容動詞の連体形である。現在は基本的には連用形と連体形しか使われないが、その連体形をここに加える。当然、限定用法のみになることが特徴となる。「連体形容詞」は国文法の連体詞をそのまま援用し、活用がない、限定用法のみの形容詞と定義する。「こそあど形容詞」は具体的には“こうだ”“そうだ”“ああだ”“どうだ”の4種類の語であり、活用はするが(連用修飾や仮定が可能)叙述方法のみ(連体形は“こんな”“あんな”“そんな”“どんな”であり、「連体詞」に含まれる)である。

この分類によって、「形容詞」というインドヨーロッパ語の言語の話者もスムーズに入れる入口があり、その次の段階で、活用や用法が違う形容詞を並立して眺めることができるようになる。「イ形容詞」と「ナ形容詞」とを並立することで意味的な用法の共通点に注目できるため理解しやすいという特徴を残し、さらに、限定用法・叙述用法に限定される語も「形容詞」として包括することで、意味・用法の理解を深めることができる。また、活用の実用という面では、「名詞的形容詞」と「名詞+だ」という全く違う性質の語を活用という観点だけで括ることにより生じる構文上の理解しにくさを排除しながら、「イ形容詞」・「ナ形容詞」・「ナ形容詞」の特殊形としての「ノ形容詞」と「ゼロ形容詞」・「こそあど形容詞」を並べることで、もともと活用には様々なタイプがあるとする。「ナ形容詞」と「こそあど形容詞」の活用を連関させることは可能で、これは一見「名詞的形容詞」と「名詞+だ」の活用の連関を強調することと似ているかもしれないが、「ナ形容詞」と「こそあど形容詞」は両方とも今回新たに設定した「形容詞」の枠組みに入っているのに対して、「名詞的形容詞」と「名詞+だ」は別々の性質をもつという点が大きく異なる。したがって、意味・用法と活用の両面において、体系的に扱うことができるのである。

本論文は、国文法の形容動詞を日本語教育においてどのように扱うことができるかということ考察したが、実際に日本語学習者の様子を確認したり、学習過程にある者の誤用を収集したり、ということは出来なかった。今後の課題とし、さらなる考察の対象としたい。

参考文献

- 飯豊毅一「形容詞・形容動詞の語幹・各活用の用法」
『品詞別日本語文法講座 4 形容詞・形容動詞』明治書院 1973
- 春日正三「形容動詞の研究—豊後文法・肯定学説を中心にして—」
『立正大学文学部論叢 56』立正大学 1976
- 小島剛一『再構築した日本語文法』ひつじ書房 2012
- 玉村文郎「現代形容語彙の構造—「分類語彙表」の「相の類」の分析—」
『同志社大学国文学会 11』同志社大学 1976
- 塚原鉄雄「『暖かい』と『暖かだ』」
『口語文法講座 3 ゆれている文法』明治書院 1964
- 原田登美「漢語形容動詞についての一考察」
『言語と文化 5』甲南大学 2001
- 水野賢「言語論における形容語—動詞と形容詞・形容詞と形容動詞—」
『日本語学』明治書院 1985.3
- 山橋幸子「和語における「形容詞」と「形容動詞」の区別—形式と意味との関わりを中心に」
『比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要 23』札幌大学 2009

参考資料

- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫・編『岩波 国語辞典 第六版』岩波書店 2000
- 新村出・編『広辞苑 第五版』岩波書店 1998
- 宮腰賢・桜井満・石井正己・小田勝・編『全訳古語辞典 第三版』旺文社 2003